

「詩画集 風の詩 かけがえのない毎日」 星野 富弘 著 学研パブリッシング
2010 年 2 月発行

この本の著者である「星野 富弘」さんは、1946 年群馬県勢多郡（現、みどり市）に生まれ、中学校の教諭として勤務していたがクラブ活動の指導中、頸髄を損傷し手足の自由を失った。その後、病院に入院中、口に筆をくわえて文や絵を書き始め「中学校の教員」から「作家・画家」として活躍された経歴をもつ。2024 年に逝去された。

本作品をご覧頂ける機会があれば、作者の生い立ちを加味して読んで頂きたい。

星野さんの作品を知ったきっかけは、2022 年の冬、私の趣味である温泉巡りの最中、東北地方のある温泉の脱衣所に星野さんの詩画の掛け軸が飾られていた。湯上がりのうとうとした状態で、柔らかなオオイヌノフグリ（オオバコ科の植物）の絵とともに以下の詩が目に入り、より一層心が温まったと覚えている。

**なにもしたくない
誰にも会いたくない
しゃべりたくもない
野に咲く花のように
一人でいたい**

**しかし腹が減った
残念だが
腹が減ってしまった**

富弘

星野さんは、自らが生きていることの感謝と喜び、葛藤を表した「温かくかつ優しく、時にユーモアに満ちた詩」を数多く作詩された。このようなやさしい植物の絵と最後にはくすつと微笑むような詩に興味をわき、脱衣所の隅で詩画には全く興味がなかった自分が星野さんの作品を検索していた。皆さんも、機会があったら手に取ってもらえたらと思う。

また現在は、群馬県みどり市に「富弘美術館」が建てられ、晩年の作品が数多く展示されている。興味があれば、足を運んでみてはいかがだろうか。